

私たちは日々の祈りの中で、ごく自然に神を「天の父」と呼びます。そこには、自分が神の側に立っているという信仰的な「確信」があるからでしょう。しかし、今日の聖書に登場するユダヤ人たちもまた、強い確信をもって「私たちにはただひとりの父がいる。それは神である」と主張していました。彼らは自らの正しい信仰を疑いませんでした。その足元で、神から遣わされた真理である主イエスを敵視し、殺そうとしていました。イエスはその彼らに向かって「あなたがたの父は悪魔である」という厳粛な現実を突きつけたのでした。私たちの抱く信仰の確信も、本当に神から来ているものなのか、それとも自分を神格化しようとする悪魔の誘惑から来ているものなのか、私たちは厳かに吟味しなければなりません。

ユダヤ人たちはアブラハムの血統や律法の伝統を自らの「正しさ」として誇り、主イエスに対して「私たちは淫らな行いによって生まれたのではない」と陰湿なあてこすりを行いました。人間が神を自らの都合の良い枠に閉じ込め、「自分たちこそが正しい」と自己神格化するとき、そこには異なる者を排除し、命を押しつぶそうとする悪魔の欲望(人殺しと偽り)が頭をもたげます。彼らは自らの偽りの確信で両手をいっぱいにしていたため、主の言葉を受け止められない霊的な「耳しい」となっていたのでした。

これに対して、真に「神から出た者」のしるしは、キリストへの「愛」に他なりません。この愛とは、情緒的な感情ではなく、父なる神から託された「命を生かす」という十字架の使命(ミッション)を共にする同労者としての深い連帯感のことです。キリストを深く愛し、その使命の傾斜の中に生きる者だけが、神の御声を我がこととして聴き取ることができます。この愛こそが、真理を分らせる唯一の力なのです。

私たちがなすべきことは、自らコントロールしようとする「偽りの確信」や誇りをすべて手放し、神の前に「空の手」を差し出すことです。自らの罪を認め、何も持たない空っぽの手を差し出すとき、そこに初めて、主の十字架が成し遂げられた「罪の赦し」という本物の真実が満たされます。自分の正しさではなく、キリストへの愛と使命に生きる神の子として、本当の自由の光の中を主と共に歩んでまいりましょう。